

ひよくれんり5

もくじ

ひよくれんり5	5
プロローグ ～幸せの意味～	6
春の贈り物	11
端午 ^{たんご} の節句 ^{せつこ} の日に	24
水羊羹 ^{みずようかん} の舞い	47
お寿司の日	58
家族会議、議題は夏休み！	68
大人のデートを二人で……	79
親子三人で海水浴！	109
夏合宿に差し入れを	122
楽しい収穫 ^{しゅうかく} 日和 ^{びより}	141
カサブタに触れる夜に	151
楽しい美味しいバーベキュー！	173
思いがけないお誘い	191
譲 ^{ゆず} れないもの、わかり合いたいもの	204
エピローグ ～幸せな未来を描いていく～	253
番外編 思い出のアルバム	267

ひよくれんり5

プロローグ く幸せの意味く

『幸せ』って、なんだろう？

ふと気になって、辞書を引いたらちよつとびつくり。

最初に書かれていた言葉は、「運が良いこと、またはそのさま」だった。た、確かに！

私が今幸せなのは、運が良かったからなのかもしれない。

だって、親に無理やりセッティングされたお見合いで最愛の人に出会えたんだもの。

じゃあ、運が悪ければ幸せにならないの？ 幸せって、そんな不確定なものなの？

ちよつと納得がいなくて、今度は『幸福』を辞書で引いてみる。

「満ち足りていること。不平不満がない状態。楽しいこと」。

うん。こっちのほうがちつくりくるなあ。私の思う『幸せ』な状態って、まさにこんな感じ。心

が満ち足りていて、楽しくて。

あれ？ でも……

ちよつとでも不平不満があったら、それは『幸せじゃない』ってことになるのかなあ？

愛する旦那様がいて、旦那様に愛され……て。（いまだに気恥ずかしい！）

旦那様との間に、可愛い息子も生まれて……

子どもが赤ちゃんの頃は家事、育児に追われて、本当に大変だったけど。

そんな息子も今では幼稚園児になり、あの頃よりも手が掛からなくなった。家事にも慣れてきて、時間に余裕を持てるように。

時には悩んだり苦しんだりすることもあるけど、楽しい日々を送っている。

そんな生活に、一体何の不満を覚えてるんだ？ 贅沢すぎる！ って、昔の自分が今の自分を見

たらそう憤ると思う。

でも、でもね……？

旦那様がお仕事に行つて、息子が幼稚園に行つて、一人で家にいる時にふと込み上げてくる、あの気持ちがあるのです。

それは不平不満というにはおこがましい感情。

自分が贅沢なんだって、欲張りなんだってわかっている。

だから口にはできない。誰にも話せない。でも……

それは心の中に降り積もって、決して消えてはくれない気持ちだった。

私こと柏木千鶴（旧姓は峰岸です）は、三十五歳の専業主婦です。

二十八歳の時、お見合いで旦那様——柏木正宗さんと出会い、結婚しました。

正宗さんは整ったお顔に眼鏡がとっても似合うイケメン高校教師（担当教科は日本史）です。お

まけに性格も穏やかで優しく、一世一代の運を使い果たしたんじゃないか！ って思うくらい、私にはすぎた旦那様です。

対する私は平々凡々。ちょっと変わっていることといえば、腐女子……いや、年齢的には貴腐人？ であることかな。身長は百五十二センチで胸は……ささやか。赤ちゃんを産んだあとは少し胸が大きくなったんですけど、悲しいかな……元に戻りましたとも！

髪はいつも肩土くらいでキープしていて、色素が薄いのは母親譲り。

そんな私たちの間に生まれたのが、一人息子の優月です。名前の由来は月がとても綺麗な夜に生まれたから、そしてこの子を産む時にともお世話になった人の名前から一字をもらい、さらに「優しい人になりますように」という願いを込めて、この名前を付けました。

優月が赤ちゃんの頃は……思い返すと本当に大変でした！

初めての育児はわからないことも、上手くできないことも多くて、でも家事もやらなくちゃいけなくて……とにかく無我夢中でしたね。

大変だったけど、嬉しいことや幸せだなあ！ って思うこともたくさんあった。

そんな優月も、もう四歳。

一番助かるのは、ちゃんと意思の疎通が図れることかな！

いや本当に、赤ちゃんの頃は何が嫌なのかとか、何をしてほしくてぐずっているのかもわからない……そんな時もありましたから。

助かるのはあと、あれ！ 夜にちゃんと眠れること！！

三時間置きに授乳してた頃とか、夜泣きが酷かった頃に比べたら……。眠れるありがたさを日々噛み締めておりますよ。

幸いにして優月は赤ん坊の頃の夜泣きが嘘のように寝付きが良くなって、一度眠ったら朝までぐっすり！

おかげで夫婦の時間も……って！ そ、それは置いておいて。

正宗さんを取り巻く環境にも、ちょっとした変化がありました。

二年前、それまで弓道部の顧問だった先生が退職され、正宗さんが次の顧問に就任されたのです。(退職された顧問の先生というのは、高校時代、弓道部に所属していた正宗さんの顧問でした)

運動部の顧問は大変！ 休日、部活のために出勤することが増えました。でも正宗さん自身はやりがいを感じているらしく、忙しくも充実した日々を送っておられます。

そうそう！ 我が家もついに車を買ったんですよ。子どもと一緒に遠出できるようにと、優月が生まれた一年後に買いました。以来、正宗さんは電車での通勤から車での通勤にチェンジ。弓道の道具を持ち運ぶことも多いので、車の方が便利なんですって。

充実……というか、楽しそうなのは優月も一緒かな？

お友達もできて、幼稚園がすごく楽しいみたいで。幼稚園から家に帰ってからは、よく今日はどうなことをしたのかとか、お友達が言ったことかやったことを嬉しそうに話してくれます。

そして私はいと、普通……かな？

朝起きて、ご飯の支度をして、旦那様と優月を起こして、一緒にご飯を食べて……

二人を送り出してからお皿を洗って。ちなみに、優月が通っている幼稚園は送迎バスが無いので、行きは正宗さんが送り、帰りは私が自転車で見送りに行きます。

午前中は洗濯して、お掃除して……

結婚したばかりの頃は家事に慣れなくて時間がかかっていたけれど、さすがにあの頃より早く終わらせることができるようになりました。(手を抜いているわけではないですよ！)

だから午後には優月の幼稚園のお迎えまでつぼり時間が空く……なんてこともありまして。小説を読んだり、BL漫画を読んだりゲームをしたりして過ごしています。

『おいおい、旦那様のお給料でずいぶん優雅な生活してんじゃねーか』って？

私もそう思う。本当に、これでいいのかなあ、申し訳ないなあって思います。

そのたびに、「そのぶん家事を頑張ろう！」とか、「旦那様や子どもにとって居心地のいい家にするんだ！」って自分に言い聞かせることで、その後ろめたさに目を瞑ってきたけれど……

でもやっぱり思うんだ。

私、このままでいいのかなあ……って。

春の贈り物

四月になり、息子の優月は年少さんから年中さんへと進級しました。

正宗さんが担任していたクラスの生徒も、同じく二年生へと進級。この学校では二年生になると修学旅行に行くから、正宗さんも秋には引率のため京都と奈良に行くらしい。羨ましいなあって言ったら、『いつか家族で行けたら良いですね』って返してくれた。

うん。本当に、いつか行けたら良いなあと思う。特に京都は元々好きな観光地っていうのもあるけど、何より正宗さんと新婚旅行で行った思い出の場所だから。

ただ、正宗さんはお忙しいから、なかなかそんな機会はないだろうなあ。

でも良いのです！ 遠出できないならできないなりの楽しみ方だって、あるのです。

例えばそう、今日みたいに……

「おかあさん、おべんとまだー？」

「はい。今持って行くよー」

お弁当を作って行く先は自宅の庭です。超近場！ ちょうど今ね、庭の枝垂れ桜が満開なのでですよ。だから今日は、その桜の木の下で親子三人、お花見をするのですー！

お弁当を詰めた重箱を持って庭に出れば、桜の下にレジャーシートを敷いて座っている旦那様と

我が子がいる。特に優月は早くお弁当が食べたらしく、「はやく〜！」と急かしてきた。

はいはい、今行きますよ〜と。

「お待ちせしました〜」

「おおー！」

重箱を開けると、優月が歓声を上げた。ふふ、そんなに凝ったものじゃないけど、喜んでもらえると作った甲斐があったというものです。

一段目には普通の食パンと茶色の食パンで作った一口サイズのサンドイッチがぎっしり。具は定番のタマゴ、ハム、チーズです。それから二段目には、ミニトマト、ブロッコリー、ニンジン、パプリカと鳥のササミのサラダがたっぷり！

最後の三段目には、アスパラのベーコン巻、玉子焼き、タコさんとカニさんのウインナーなどのおかずを詰めた。

三人で食べるにはちよつと多いかな〜？ とも思うけれど、まあ、余ったら明日の朝ごはんで食べればいいんですよ！

「張り切りましたね」

正宗さんがくすつと笑う。

「えへへ。お花見ですからね！」

桜を見るだけでも楽しいけれど、こうして美味しいお弁当があるとより楽しいじゃないですか。

私はお皿におかずやサンドイッチを取り分け、お箸を添えて二人に手渡す。それから正宗さんの

グラスにビールを注いで、私と優月はペットボトルのジュースを手を持った。そして乾杯！

さつそくとばかり、サンドイッチにかぶり付く。

「いただきます。んむっ、美味しい！」

へへへー。我ながら良いお味です。

「美味しいですね。このサラダ」

サラダを食べた正宗さんが、そう褒めてくれる。

よっし。今度また作ろうつと。

「この間ネットで見つけたレシピなんですよ。お口に合ってよかった」

「おかあさん、タコさんください」

カニさんウインナーを食べた優月が、今度はタコさんを御所望だ。はいはい、待っててね〜。

優月のお皿にウインナーを載せたら、ひゅうつと風が吹いてきた。

ざざざざと音を立てて、桜の枝が揺れる。地面に落ちた花びらがふわつと舞い上がって……

「あ……」

優月の頭の上に、ちよこん、と載った。

「どうしたのー？」

「……ふふっ」

「はは……っ」

「えー？」

私と正宗さんはくすくすと笑い、なぜ私たちが笑っているのかわからない優月はきよんとして首を傾げている。それがまた可愛くて、私はスマートフォンを持ってきていけばよかったなあと思った。ベストショット、撮れたのに。

そう考えていると、同じことを思ったらしい正宗さんがポケットからスマートフォンを取り出して、ぱしゃつと優月の写真を撮った。見せてもらったそれには、桜の花びらを頭に載せている優月の姿がばつちり写っている。完璧です！ 正宗さん。

「優月の頭に、ほら」

正宗さんは、撮った写真を優月に見せた。

「わ！ もう、いつてよねー」

優月はぶう、と頬を膨らませ、自分の頭に手をやると花びらを取ってしまふ。

うん、くすくす笑ってごめんね。だって、とっても可愛かったから。

綺麗な桜の花を見ながら家族三人で食べるお弁当はすごく美味しくて、何より楽しい。

「あそんでくるー」

「お庭から出ちゃダメよ？」

「はいー！」

大人より早く満腹になった優月は、家の中に玩具を取りに行った。

まあ、じつとしてるのも退屈だろうしね。桜を綺麗だとは思っているみたいだけど、やっぱり遊

んでいる方が楽しいんだろう。

優月が持ってきたのはシャボン玉のセットだった。黄色のフタがついたピンク色のボトルに、ミントグリーンのストロー。この間スーパーで買ったものである。優月の最近のマイブームはシャボン玉遊びらしい。

今も、縁側にちよんつと座ってストローの先をボトルの中に入れ、ふううつと息を吐いてシャボン玉を作っている。

ふわふわと飛んでいくシャボン玉、綺麗だなあ。

私たちはそれを見守りながら、ゆっくりにお酒を楽しむ。

私もたくさんは飲まないけれど、お弁当をおつまみに、梅酒をのんびりと飲んだ。うふふ、美味しいなあ。

ぽかぽか陽気が気持ち良くなって……なんか眠たくなってくる。

春眠暁を覚えずとも言ふし。本当、眠るのに良い季節です。

おと……、今度は優月は、砂遊び用のシャベルを手にしております。そして、庭の固い地面を掘り始めます。それはもう楽しそうに……楽しいか？

ひたすら穴を掘るだけの遊びです。母には何が楽しいのかさっぱりわかりません。

「何が楽しいんでしょうね？」

「たぶん、単純に土をいじるのが好きなんでしょうね。俺も小さい頃は、よく泥団子を作って遊んでいましたよ」

正宗さんが泥団子!? 意外! と思ったのがそのまんま顔に出てしまったのか、正宗さんは苦笑して「俺にもそういう時代があったんですよ」と言った。

「最初は単純に、泥で遊ぶのが楽しくて。ほら、あのべちゃべちゃした手触りと、ひんやりとした冷たさが気持ちいいじゃないですか。あと、綺麗なまんまるに作ることにこだわったり。……千鶴さんは? 小さい頃は何をして遊んでいました?」

「ええと……」

「そうだなあ。子どもの頃は……」

「やっぱりおままごと、ですかねえ。近所の女の子たちと。摘んできた草とか花をね、野菜に見立てて砂と一緒に調理したり……って言っても、混ぜたり、水に浮かせたりするだけなんですけど。そんな風に遊んでいましたねえ」

話しているうちに、日が暮れるまで夢中になって遊んでいた子ども時代を思い出して、なんだかとても懐かしい気持ちになった。

しみじみしていると、土で汚れた手を握って優月がこちらに駆け寄って来る。

「おかあさん、おかあさん!」

「なあに?」

「すごいみつけた! みてみて! これあげる!」

優月が軽く握っていた手を開くと、そこにいたのは……

ウズウズと動く、大きな毛虫。

「きゃあああああ! ゆ、優月、ポ、ポイしなさいポイ! 早く!」

「えー? なんで? すっごいのに!」

「そうだよすっごいよすっごくでかくて気持ち悪いっ!」

「あああだめだ鳥肌が! いやあああああ!! よく触れるね、そんなものっ!」

「優月、貸しなさい!」

パニックに陥る私に代わって、正宗さんが冷静に優月の手から毛虫を取り上げ、どこかに放しに行った。

「おかあさん、ミミズさんはすきなのに〜」

「せっかく持つてきたのにと、優月は不満そうにしている。」

別に好きじゃないよっ! 畑を肥やしてくれるのはありがたいと思ってるし、見たり触ったりするのはまあ平気だけど、決して好きなわけじゃないよ! でも毛虫は無理!!

ひいひい! 駄目! ぞわつとするわ!

もう! 優月のおばかー!!

* * *

毛虫事件のあと、千鶴さんはずっと機嫌が悪かった。

今は一人、台所で洗い物をしている。優月が手伝うと言ったが、「いらない」とつつぱねて。

それほど毛虫が嫌いなのだろう。まあ、確かに好きだという人の方が少ないか。まして女性ならなおさら。

優月は悪戯をしようとしたわけじゃなく、純粹に母親を喜ばせようとしただけのようだ。俺は一応、「女の子に虫を贈ったら嫌われるからやめておきなさい」と言っておいた。

「おかあさん、ケムシさんきらいなの？」

茶の間から、台所にいる千鶴さんの様子を気にしつつ、優月が尋ねる。

「そうみたいだね」

優月はしょぼん、と落ち込んでしまう。

喜ばせようとして、裏目に出てしまったんだものな。あ、そうだ……

俺は小声で優月に問い掛けた。

「優月、お母さんが好きな物はなんだと思う？」

「え……？ ええつとね、ごはん」

優月も内緒話だと察したのか、小声で答える。

「つ……まあ、そうだな」

確かに千鶴さんは食べることが大好きだ。だが息子にまで即答されるとは……

いかんいかん。笑いを堪えるのに必死になってしまう。

俺はこほん、と咳払いしてから、優月を諭した。

「いいかい、優月。プレゼントはね、その人が欲しい物、好きな物を贈るんだよ。さて、お母さん

が一番好きな食べ物は何だろうか？」

「イチゴ」

優月は右手を上げて小声で答える。

そう、母は千鶴さんの大好物だ。

「今からお父さんと一緒に母を買いに行こう。それで、お母さんにちゃんと『ごめんなさい』って謝るんだ。できるな？」

「はい。ぼく、ちゃんとごめんなさい、する」

善は急げと、俺は台所にいる千鶴さんに「優月と散歩に行つてきます」と声を掛けて、息子の手を引いて近所のスーパーに向かった。

スーパーまで歩くのは、腹ごなしにもちょうど良い。

道端にはタンポポも咲いていて、改めて春だなあと思った。

優月もどうせなら、こういうものをプレゼントすれば良かったのにな。

「まあ、毛虫は良くなかったけど、お母さんに贈り物したいと思った気持ちは偉いぞ、優月」

そんな気持ちで大事にして、心のまっすぐな子に育ってほしい。

そう褒めると優月は、頬を緩めてはにかむ。

「えへへ。あのねー、おつきかったよね、あのケムシさん。ぼくびつくりしてね、で、おかあさんにもみせてあげようとおもったの」

話している間、優月の表情はくるくる変わる。毛虫を見つけた時のことを話すびつくりした顔、

得意げな顔、それから千鶴さんに怒られてしょんぼりした顔。

この子のこういう素直なところは、千鶴さんにそっくりだ。

「ねーねー、おとうさん」

「ん？ なんだ？」

「おとうさんと、おかいものだね！ えへへ、へへー」

そういうば、二人でスーパーに行くことなんてめったにないもんな。うん、お父さんも嬉しいよ。

スーパーで、優月が「これがいちばんおいしそうなの！」と言って選んだ苺をワンパック買って、家に帰る。

千鶴さんは茶の間でテレビを観ていたけれど、心ここにあらずでソワソワしていた。きつと、さつき拗ねてしまったこと、優月を怒ってしまったことを気にしているのだろう。

そして優月も、帰るまではごめんなさい、と言う気満々だったのに、いざ千鶴さんを前にすると、もじもじし始めた。

「ほら、行きなさい」

そんな息子の背をぼんと押してやると、優月は苺のパックを抱えて千鶴さんに近寄った。

「お、おかあさん！」

「優月……。お帰りなさい。どうしたの？ その苺」

「あのね、あのね、これ、プレゼントなの。ケムシさんみせてごめんなさい。ごめんなさいの、プ

レゼントなの」

「苺……」

「千鶴さん、優月は千鶴さんが喜ぶと思って、ケムシを持って行ったんですって」

「プレゼントはね、すきなものをあげるんだよっておとうさんだったの！ だからね、イチゴ、プ
どーぞー！」

「優月い……。正宗さあん……」

ああ、千鶴さんの顔がくしゃつと歪む。

「ううう！ お母さんもごめんねえええー！」

そしてがばつと、優月を抱き締める。

「怒ってごめんね。ありがとう、嬉しい。すつごく嬉しいよ！」

「おかあさん、こんどケムシさんいたら、ぼくがエイッとしてあげるね」

「優月いいい！」

ああ。優月の言葉で、千鶴さんの涙腺が決壊した。

まったく、しょうがないなあ。

愛おしさが込み上げてきて、ついつい口の端が緩んでしまう。俺は二人に近付くと、奥さんと息子をそつと抱き締めた。

「……ま、正宗さん？」

「うい」

「おとうさんも、ぎゅーだ！」
きやつきゃつと、嬉しそうに優月が笑う。

「ついつて、もう……」

苦笑しながらも、千鶴さんはぎゅうつと抱きついてくれる。
なんとも微笑ましい家族の姿だった……のだが。

「あっ」

突然、千鶴さんが声を上げた。

「苺！ 潰れてる！」

「あっ」

「ああ……」

優月が持っていた苺が抱き合った拍子にぐしゃりと潰れてしまった。

「せつかく買って来てくれたのに。でも、潰れてても美味しくいただきます！」

千鶴さんはそう言うなり、台所に苺を洗いに行く。そして皿に盛って戻ってくると、潰れた苺を一つ摘まんで、ぱくりと口を含む。

「んん〜！ 美味しい！ 今まで食べた苺の中で一番美味しいよ、優月」

「やったあ！」

「優月もほら、アーン」

喜ぶ優月の口に、千鶴さんは苺を一つ運ぶ。

それから、俺の口元にも。

「正宗さんも、はい、どうぞ」

「いただきます」

潰れてしまった苺は、家族の想いがぎゅうつと詰まっついて……

「……美味しい」

千鶴さんの言う通り、今までに食べたどんな苺よりも美味しく感じられた。

端午の節句の日に

雲のない晴天の日。住宅街にぼつぼつとあがっている鯉のぼりが、気持ち良さそうに空を泳いでいる。

その日、私は朝からご馳走作りに勤しんでいた。

今日は五月五日、子どもの日なのです！

毎年この日は実家の両親と弟、それから友人たちを家に招いてお祝いをしています。

我が家は鯉のぼりはあげずに、実家の両親に買ってもらったケースに入った兜飾りを出します。

ちなみに兜は戦国時代の武将、伊達政宗公モデルです！ 私が一番好きな戦国武将だし、兜のデザインもカッコイイし、それに……

名前が、ね。漢字は違うけれど、旦那様と同じだから。男の子が生まれたら絶対にこの兜！ って決めていたのです。

初節句の時に買ってもらったものだから優月が選んだわけではないけれど、優月もこの兜飾りが大好きなんです。毎日幼稚園に行く前に兜の前でニコニコしたりしてるし、オルゴール（ケースにオルゴールが付いてるんです）を回して、一緒に『鯉のぼり』を歌ったりしています。熱唱です。

兜の前立ての弦月。『これはお月様なんだよ』って話して以来、自分の名前と同じだ！ って

親近感を覚えているようですし、『伊達政宗』の『政宗』は、『漢字は違うけど、お父さんと同じ「まさむね」なんだよ』って話してからは、『おとうさんといっしょ！』って、ますます好きになったみたい。優月がこれほどまでに愛着を持っていることを知って、両親はすごく喜んでいました。けな。

そんな優月は今何をしているかというと、兜飾りを飾っている和室で熱心にある物を作っています。それは……

「おかあさん！ できたー！」

おっ、完成したみたい。優月が台所にたたつと駆けてきました。

その小さな頭に載っているのは、新聞紙で折った兜！

「おお、上手にできたね」

「へへ」

優月は得意げに笑っています。この間幼稚園で折り方を教わったんですって。今日はこれを被ってお祝いパーティーに出るんだと、張り切っていました。

「おかあさんも、できた？」

「うん。ご馳走いーっぱいできたよ。優月の好きな唐揚げもあるからね」

「きゅー！」

歓声を上げた優月は、そろーり、そろーりと食卓に近づく。そこに揚げたての唐揚げがあるのです。

「ほんとうに、おいしく、できたかな？」

「……………」

「カクニン、したほうがいいんじゃないかな？」

こっ、こいつ……………」

あくまで「自分は皆のためを思って言っているんだよ？」の態度で、遠回しに味見を要求している！ 要するに食べたいんでしょ！ 今！

「食べたいなら食べたいて言いなさいよ！」

「ん、カクニンしてあげてもいいよ？」

もー！ そんな言い方するなら……………」

「確認ならお母さんがします」

私はツーンとそっぽを向いて、熱々の唐揚げをひょいっと口の中へ入れる。

あふつ。ん、外はカリカリで中はジューシー！ 我ながら美味しい。

「美味しい。よし、確認オッケー！」

問題ありません。

「ああああ……………」

おお、優月が悔しそうな顔でこちらをじーっと見つめてくる。

もー、そんな顔も可愛いなあ。

「お母さんに言うことは？」

「…………、ください！ ぼくにも、からあげー！」

最初から素直にそう言っていれば良かったのだよ、優月くん。

「はい、一つだけね？ 熱いからちよっと待ってて」

唐揚げを一つつまみ、ふうふうを息を吹きかけて冷ます。それを、大きく口を開けて待っている

優月に…………はい、どうぞ。

「ん、ん！」

優月はもぐつ、もぐぐつと咀嚼して、ふにやうつと顔を綻ばせた。

「うまー！」

「ほっほっほ、美味しいか、そうか」

「とってもおいしー！」

えへへ。こんなに喜んでもらえる、嬉しくなっちゃうよ。

こういう時、家族の笑顔が主婦の原動力なんだなあってしみじみ思う。

「ようし、それじゃあ優月。兜も仕上がったし、お母さんのお手伝いしてくれる？」

「はい」

優月にお箸やお皿を運んでもらって、和室のテーブルに料理や飲み物が並んだ頃、お客様がいらっしゃいました。

お茶の間で新聞を読んでいた正宗さんが立ち上がり、優月と一緒に玄関へお客様をお出迎えに行

く。最初にやって来たのは、実家の両親と弟だった。

お？ 今優月が「きゃ〜」って歓声を上げたな。きつとプレゼントを貰ったんだろう。子どもの日には、両親と弟が優月にプレゼントを買って来てくれるのだ。

「おかあさん！ おじいちゃんとおばあちゃんと、ひーちゃんからもらった！」

新聞紙の兜飾りを被った優月が、嬉しそうにプレゼントを抱えて走って来る。

私は和室に入って来た両親と弟に「いらっしやい！」と声を掛けてから、優月に「良かったね〜 お礼はちゃんと言った？」と尋ねた。

「うん！ いった！ あけていい？」

「ぶりびりはだめよ。やさしく、あけてね」

「はいっ」

元氣よく返事をして、優月がラッピングの包みをそつと開けていく。両親から貰ったのは絵本だった。この子は読書家の正宗さんに似て絵本が大好き。包みから出てきた絵本をぎゅつと胸に抱いて破顔してから、改めて「ありがとう！」とお祖父ちゃんお祖母ちゃんにお礼を言う。

「優月、俺も開けてみな」

そう声を掛けたのは、私の弟の雲雀だ。現在は東京の企業に勤めている。ちよつと童顔のため、今でもたまに大学生に間違われるらしい。

優月にとつては叔父に当たるけれど、優月は「おじちゃん」ではなく「ひーちゃん」と呼んでいる。

ありがたいことに雲雀は優月をとても可愛がつてくれていて、会うたびにプレゼントをくれる。

優月の大好きな叔父さんだ。

「うんっ」

同じくそつと開けた雲雀からのプレゼントは、缶箱に入ったお菓子のようだった。

「わあ！ おかし！」

「東京で評判の店のなんだ。お母さんと仲良く食べるんだぞ」

「うん！」

あ、私も食べていいのね。ふっふっふ、楽しみだね〜。

今日のデザートはあるから、このお菓子は明日のおやつにいただきますしよ！

両親と雲雀が席に着いたところで、次のお客様が！

「あつ、ろうちやんたちだー！」

優月が勢いよく駆け出して、玄関までお出迎えに行く。正宗さんも苦笑して付いていき、二人でお客様を和室に案内してきた。

「やー、遅くなってすみません」

一声かけて入って来たのは幸村真さん。正宗さんの学生時代からのご友人で、同僚でもある。幸

村先生は正宗さんの学校の養護教諭なのだ。

「お久しぶりです」

そしてもう一人、水無月朧さん。相変わらず着物姿が良く似合う美青年でいらっしやる！ 現在、

日本画家として活躍されている彼は、幸村先生の恋人だ。ええ、つまりお二人は同性同士のカップルなのである。

ちなみに優月の名前の由来、月の字は隼さんからいただいたのです。この子を産む時、とても力になって下さったから。

お二人とはお互いの家で食事をしたり（幸村先生と隼さんは今一緒に暮らしているのです）、一緒に遊びに行ったり、時には旅行に行くこともあり、親しくお付き合いさせてもらっている。もう一つの家族……みたいな存在だ。

それは実家の両親も知っていて、初節句の時に『幸村さんと水無月さんにも来ていただいたら？』と提案したのも実は母なのです。

正宗さんは中学生の時、ご両親を亡くされている。その後育ててくれたお祖父さんも亡くなって、近い親族がいない。その代わりと言ってはただけれど、幸村先生と隼さんにも『家族』としてお祝いに参加してもらったら？ と。

以来、端午の節句には峰岸の家族と、幸村先生と隼さんが顔を出してくれるようになった。『家族』に祝ってもらえて、優月はとても幸せそうだし、私も正宗さんも幸せだ。

「千鶴さん、幸村と水無月からこれをいただきましたよ」
「わあ！ ありがとうございます！」

正宗さんが私に手渡してくれたのは、和菓子屋さんで買ったと思しき包み。中身はわかっています。本日のデザート！ 柏餅です！

事前にね、隼さんから連絡をいただいていたのですよ。今日の柏餅、自分が用意するから、つて隼さんお気に入りの和菓子屋さんのもなんですつて！ ご実家が高級料亭の隼さんの舌は肥えているからな。楽しみですよ！

さて、全員揃ったのでお食事にしましょうか！

朝から張り切って作ったご馳走です。今日のメニューはお祝い事の定番、お赤飯！ それからイナダのお刺身にブリ大根。イナダはブリの幼魚なので、つまり同じお魚です。成長するに従って呼び名が変わることから『出世魚』と呼ばれ、縁起が良い物とされています。

そして筍のお吸い物！ 筍のようにすくすく育ちますようにつてことで、端午の節句にはよく筍料理が出されるんだとか。うちもそれに倣って、必ず筍を食べます。

あとは優月の好きな鶏の唐揚げに、豆腐と水菜、大根の上に刻み海苔をちらした和風サラダ。それからうちで漬けたキャベツとニンジンのお漬物も出しました。

大人たちはお酒で、優月はジュースで乾杯っ！

料理に舌鼓を打ちつつ、お喋りに花が咲きます。

あつ、幸村先生がお母さんにお酌を……！ すみませんっ、ありがとうございます。

イケメンにお酌され、お母さんは上機嫌だ。お母さん、幸村先生と隼さんのこと、気に入っているからな。そしてお返しにと、お母さんは幸村先生のグラスにビールを注いだ。近況とか、ご近所の噂話なんかも交えて、楽しそうに笑い合っている。（ちなみにお母さんと幸村先生の声が一番大きい）

正宗さんはお父さんとお話し中。二人とも静かに話しているけれど、お父さんはにこにこ嬉しそうだ。お父さん、正宗さんのこと大好きだからなあ。一度正宗さんにそれを言ったら、正宗さんははにかみながら『嬉しいです』と言ってくれて……

その顔を見た時はマジで鼻血が出るかと思いました。義父と婿のカップリングもありか！なんて腐ったことを考えてしまいました……

お、隼さんが雲雀に絡んでいるぞ。隼さんいわく、雲雀は私に似てて面白いんだとか。(どういう意味ですか！)

雲雀がむっとした顔をして、剣呑な空気を察知した優月が「なかよく！」なんて注意するものだから、雲雀は一転デレツとした表情に。(甥っ子に怒られても嬉しいのか弟よ……)

隼さんはそんな雲雀の様子を見て、ますます楽しげな笑い声を上げた。

そしてたぶん雲雀に見せつけるため、「優月、来い」と両腕を広げ、「きゃ〜」と嬉しそうにやって来た優月をぎゅうつと抱き締める。優月ははしゃいで、「ろうちゃん〜」とハグを返した。

隼さんは優月が赤ちゃんの頃からしょっちゅう遊びに来て下さって、この子の世話もよく手伝ってくれたのです。

物心つく前から側について遊んでくれた綺麗なお兄さんのことを、優月は心から慕っている。隼さんもこの子をとても可愛がってくれていて、まさに相思相愛。それはもう、時に恋人の幸村先生も妬いちやうほどの、お父さんの正宗さんも危惧するほどのラブラブっぷりです。

二人のいちやいちゃを見せつけられた雲雀は悔しそうに、いや、羨ましそうに隼さんを睨む。

ああ駄目だよ雲雀。隼さんはそういう反応が見たくてやってるんだって！ 案の定、隼さんは機嫌よさそうにフンと笑っている。うう、相変わらず意地悪な人だ。

だけど……、ごめん！ 弟よ。

(意地悪な年上美青年に苛められちゃう弟キャラ……美味しいな！)

こんな時でもついつい妄想の翼で飛んでしまう。それが腐女子の性なのです！

そんな楽しい食事を終え、デザートに美味しい柏餅をいただいたあと、優月は雲雀と隼さんと一緒に庭で遊び始めた。新聞紙の兜を被って、武将ごっこをするんだって朝から張り切っていたなー、そういえば。面白かった隼さんが優月に口上を教えて、雲雀が新聞紙を細く丸めて『刀』を作り、優月は「われはだてまさむねなりー！」なんて叫んでいる。ふふふ、小さな独眼竜だ。

正宗さんと幸村先生とお父さんは、三人でお酒を飲みつつ碁盤を囲んでいる。

幸村先生は最近になって囲碁を覚えたらしく、お父さんを参謀に正宗さんと真剣勝負！ さてさて、今日こそ正宗さんに勝てるかな？

そして私はどうと、お母さんと一緒に台所でお皿を洗っていた。最初は一人でやるつもりだったんだけど、お母さんが「私も手伝うわ」と言ってくれたのだ。

お母さんは囲碁がわからないので、男性陣の勝負を見ているよりお皿を洗ってる方がいいんだって。量が多かったので、正直助かる。

「ゆーちゃん、大きくなったわねえ」

「うん。本当、子どもの成長は早いなあって思うよ。ちよつと前まで赤ちゃんだったのにね」
きゅつきゅつとスポンジでお皿を洗いながら、私はしみじみと息を吐く。

再来年には小学生だもん。本当、早いなあ……

「ふふっ。顔立ちは正宗君に似てるのに、中身はまんま、あんた似よねえ」

「うっ……」

そ、それは良く言われる……！

いや、うん。自分でもそう思うし。とくに食べるのが大好きなところとか美味しいものに目が無
いところは私にそっくりですよ！

外見が正宗さん寄りなのがせめてもの救いです。

どうかこのままお父さんに似たイケメンに育ってくれよ！ と思います。でも外見が正宗さんで
中身が私とか、それはそれで残念な気もしますが……。ええと、とにかく！

(元気に育ってくれたら、それでいい)

イナダがブリに、鰹が龍になるように「出世」してね！ とまでは言わないけれど、筍たけのこみたいに
スクスク、健康に育っていつてくれたらいいなあ、母は思うのです。

端午たんごの節句せきぐの夜は、菖蒲湯しよぶゆに浸つかります。実家ではそういう習慣はなかったんだけど、優月が生
まれてから、ご近所たかほしの高橋たかはしさんのお祖父ちゃんおぢいちゃんがね、庭にわで育てている菖蒲しよぶを分けて下さるよう
なつて。今年も菖蒲しよぶをいただきました。

これに入れば、暑い夏も健康に過ごせるんだつて。菖蒲しよぶは良い匂においがするし、身体もぽかぽかと
温まるから、けっこう気に入っている。

今は正宗さんが優月と一緒に風呂に入っている。お風呂場からは楽しそうにはしゃぐ我が子の
声が響こぼいてくる。「かくごー」なんて声も聞こえてきて、たぶん、菖蒲しよぶの葉はを剣けんに見立てて遊んで
いるんだろう。武将ぶしょうごっこが気に入ったみたい。昼間も、雲雀いさなを相手に勇いさましく戦たたかっていたようだ
し。男の子だねえ。

そして二人が上がったあと、入れ替わりで私がお風呂に入る。優月は正宗さんが寝かしつけてく
れる予定だ。

「上がりましたよ」

茶の間で二人を待っていたら、湯上がりの正宗さんが頭にタオルを被かったまま、そう知らせに來
てくれた。

はふう……。何年見てもドキッとしちゃう、お風呂上がりの正宗さん。寝巻ねまきの浴衣ゆいからちら
りと覗のぞく鎖骨せきこつや、濡ぬれた髪かみの張り付いた首筋くびすぢとか……。歳としを重ね、さらに色氣いろけを増したような氣
がします。

「はい。じゃあ私もお風呂に……」

「千鶴さん」

すれ違いざま、ぱしりと手を取られ、正宗さんの口が耳元に近づく。

「……部屋で、待ってますね」

低い声で囁かれた言葉に、かあっと体温が上がった。

『部屋で待っている』は、私たちの間で使っている隠語……のようなもの。

普段寝ている寝室ではなく、部屋——ここでは私の使っている部屋を指す——で待っていると云うのは、つまり……

ふ、夫婦の営みをしましうね、ってことなのだ。

いつも私たち親子三人は、寝室のダブルベッドで川の字になって寝ている。だからその、さすがに子どもが寝ているベッドでそういうことをするのは……ということ、セックスは主に私の部屋か、時々お風呂場でもするようになった。

私がお風呂に入っている間に、正宗さんは優月を寝かしつける。あの子は寝付きも良いし、今日はいっぱいはしゃいで疲れているだろうから、すぐにぐっすり寝入るだろう。

そうして、正宗さんは私の部屋で待っている……と。そういうことを、するために。

これが初めてなわけじゃないし、今までに何度となく身体を重ねてきたのに……

(……む、胸が……)

恥ずかしくて、緊張する。そしてこれから始まることへの期待とで、胸がドキドキと高鳴るのは……

何年経っても、変わらないのだ。

『部屋で待っている』と言われた夜は、いつもより念入りに身体を洗う。

隅々まで洗って、ムダ毛の処理もばっちりして、お風呂に浸かった。

あんまり待たせちゃ悪いかな……？ と急ぐ気持ちと、いい匂いにする菖蒲湯にもう少し浸かっていたい気持ちとが交錯する。

「はふ……」

温かくて、気持ち良いお風呂……

そして湯上がりには、旦那様ともっと気持ち良いことをするんだな……って思うと。

「きゃあー」

胸がいつばいで、居ても立ってもいられなくて。私はざぶん、とお湯の中に潜った。

「ふはっ」

そ、そろそろ上がろうかな。

正宗さんも、待ってますしね……

お風呂から上がって、身体に大きなタオルを巻き付け、洗面台に向かってドライヤーをかける。我が家にはドライヤーが二台あって、もう一台は寝室の鏡台の上にあるんだけど、そこでかけちゃうと優月が起きちゃうからね。

「……よし」

そして下着や寝巻は……着けない。す、すぐに脱ぐことになるからね！

だから私は、裸にタオルを巻いただけの恰好で二階上がった。私の部屋に行く前に、寝室の様子を窺う。扉を開けてちらっと覗くと、照明を落とした室内で、ベッドの上から優月の規則正しい

寝息が聞こえてきた。

それにほっとして、いよいよ私の部屋へと向かう。

そろーっと襖ふすまを開けると、正宗さんは長座布団に座くつろって寛いでいた。手には本を持っている。あ、あれは……！

「ちよっ！ 正宗さんそれ！」

「おかえりなさい、千鶴さん」

いやそんなニコニコ顔でお迎えされても騙だまされませんよ！

それ、私の本（BL漫画）じゃないですか！

また勝手に読んで……！ 恥ずかしいからやめて下さいって言ったのに！

「ついつい」

「ううう……」

結婚後に趣味がバレて以来、正宗さんは私の腐しった嗜好しこうにも理解を示して下さる。それは本っ当にありがたいのだけれど、私の愛蔵本を読むのは勘弁してほしい。え？ 読まれるのが嫌ならちゃんと隠かくせて？ これ読まれたら死ぬ！ レベルのハードなヤツは鍵付きのブックボックスに隠してあります！ こ、これくらいならいいか……とか、正宗さんも引かなかったし……というレベルの本は、カバーを付けてそれとわからないようにして本棚にしまっている。その本棚のヤツを、読まれちゃうんです。

心底嫌なわけじゃないけど、こう……

「BLって、男子高モノが多いんですね」

いたたまれないんだよ！

旦那様にBLについて語られると、いたたまれない気持ちになるんだよ！

エロ本見つかって「あんた巨乳好きなの？」って母親に言われる男子中学生ぐらい、いたたまれない気持ちになるんだよ！

ちなみに正宗さんが今読んでいるのは、男子高を舞台にした後輩×先輩モノです。

うん。男子高って腐女子かびむすめにとってはパラダイスみたいなもんだからね。

「……まあ、男子高に行いった知り合いも、学校に同性のカップルがいるって言ってましたが」

「えっ。それ詳しく！」

私が正宗さんに擦すり寄ると、彼はくすくすと笑い声を上げて言った。

「やっとな来てくれた」

「あっ……」

と声を上げた瞬間、正宗さんの整った顔が間近に迫り、私は目を瞑つぶって口付けを受ける。

正宗さんは持っていた本をテーブルに置き、私を抱いたままゆっくりと後ろに倒れる。私は仰向けに寝転がる彼の上に乗る形になった。その体勢で、何度も何度もキスをする。ふにと唇を合わせるだけのキスも、互いの舌を絡め合うキスも、何度も……

「ん……っ、つぶ……あっ……」

正宗さんとするキスが好き。互いの唾液だえきが混じり合まって、とてもいやらしい。熱が高まって、ぞ

くぞくつと背筋に快感が走る。このまま蕩けて、どうにかなってしまいそう……

「んっ、んんっ……」

キスに酔っている間に、正宗さんはきつく巻いていた私のタオルを取り払ってしまう。下着一つ身につけていない身体が、彼の目に晒される。

「ひっ……」

彼は私の胸の頂をくりくりと弄った。私のソコは子どもを産んで母乳で育てて以来、前よりも少しだけ大きくなっている。その頂を、摘ままれ、捏ねられると……

「あ……っ、あう……っ」

ぞくぞくつと、下肢が震えてしまうのです。それをわかっている、正宗さんは執拗にソコを責め立てる。

とろ……つと、秘所が濡れてきたのがわかる。ついにもじもじとしてしまっ、気になって。私はそつと、自分の指で秘所に触れた。

ねっとりとした髪の毛の奥を指で撫でると、そこはもう滴でしとどに濡れている。

「あっ……」

「自分で弄るなんて、いけないんだ」

正宗さんはにっこ嗜虐的な笑みを浮かべた。

「俺に胸を弄られて、自分でソコを弄って、気持ち良い？」

「ふあっ……ご、ごめんなさ……」

弄ろうとしたとか、そんなんじゃないやなくて……

でも、だって、正宗さんが全然、ココに触ってくれないからあ……

「だめ、おしおきです。自分で弄って、イッて下さい」

「そっ、そんなあ……」

正宗さんは時折、意地悪になってSッ気全開で私を苛める時がある。今日はどうやらそのスイッチを押してしまったらしい。でも……

「恥ずかしい……」

と言いつつ、そんなことを強要される状況に快感を覚えてしまう私も大概ですよ！ すみません！

正宗さんから身を離し、私は恐る恐る足を開いて彼の前に秘所を晒す。うう、恥ずかしい。でも、身を起こしてあぐらをかく彼が「ほら？ やって？」と目で訴えるから……

「んっ……」

私はそつと、自分の指で秘所に触れた。

「はあ……っ」

見られている。彼の前で、こんなことをしている姿を。

でもその羞恥心が、快楽を押し上げて……

「んっ、んんっ……」

私はその熱に浮かされたように、とろとろに濡れた髪を擦り、自分の指をぐつと沈めた。

「んあ……っ！」

指に、ぷくりと勃ち上がった芽が触れる。一番敏感なココを、くりくりと弄る……だけ……で……っ……ふああ……！！

「あっ、ああっ……」

ぞくぞくっど、快感が走って。

「ひっ……うあ……」

私は呆気なく、自慰で果ててしまった。

「ああ……」

それまではただ快樂で頭がいっぱいだったけど、ふいにすうっど熱が引いていく。あとに残るのはどうしようもない罪悪感。私はひっくと泣きだしてしまった。

「千鶴さん……」

旦那様の前で、こっ、こんな……！！

自分の指で弄ってイクとか、どんだけ淫乱だよ自分！ と、己へのがっかり感で胸がいっぱいになる。泣きじゃくる私に、正宗さんは心底申し訳なさそうに「ごめんなさい、意地悪しましたね」と謝ってくれた。そして、そっど抱き締めてくれた。

「ごめんなさい、千鶴さん」

「うっ、ひっく……」

「あなたが可愛くて、つい苛めてしまいました。ごめんなさい」

「うう……」

いや、あの、私も悪いですから。というか……、な、泣いちゃってごめんなさい……！！

でも涙はすぐに止まらず、私は正宗さんの腕の中でぐずぐず泣いてしまう。

そんな私をあやすように、正宗さんは優しく背中を撫でてくれた。どうやら、今日のSッ気タイムは終了したようだ。

「今度は優しくしますから、許してくれませんか？」

「ん……」

許してくれませんか、だなんて。無理強いされたわけじゃないし、ただ、自分どうしようもないな！ って気持ちじゃ極まっただけで……

正宗さんは悪くないです。確かに意地悪だったけど、そんなところも……

「大好き……」

「千鶴さん……」

「あっ」

もう一度、キス。深く深く、貪るようなキスだった。

「なんでそんな……。優しくするって言ったのに、できなくなりそうですよ……」

キスをしているうちに、私は長座布団の上に押し倒されていた。

マッパの私とは違い、正宗さんははだけた浴衣を纏って……エロい。

正宗さんの瞳に、情欲の熱が宿っている。それが、なんだか嬉しくて……

この人に、そういう目で見られることが無性に、嬉しくて。

私はつい調子に乗り、意地悪を言った。

「……だめ、です。優しく、して？」

「つ……！ 善処します」

もう辛抱できない、と言わんばかりの正宗さんが、それをぐつと堪えようとしている。そんな姿にぞくぞくつと感じてしまう私は、Mッ気だけでなくSッ気もあるのかもしれない。

正宗さんはいったん身を離すと、テーブルの上の小さなパッケージを手を取った。コンドーム、避妊具だ。

優月を授かるまではほとんど使っていないが、生まれてからは着けるようにしている。

優月が赤ちゃんの頃はお世話が大変で、とても二人目を育てる余裕なんてない！ と思って避妊するようにしていたのだ。

そしてそのままずると、今に至る。二人目を作る気がまったく無いわけではないんだけど、なんとなく……踏ん切りがつかないというか。

正宗さんはすっかり勃ち上がって準備万端な自身に（準備万端言っうな！）、するするとゴムを着する。手慣れたもので、あつという間だ。

「んっ」

そして先端をぴたりと秘所に宛がい……

「んん……っ」

ゆっくり押し開くように、ナカに挿入ってくる。

「ああっ……」

腰の動きは緩やかで、まるで私を労わるよう。

お願いした通りに優しくして下さいる旦那様に、私は愛しさが込み上げてくるのを感じた。

「ぎゅって、して……」

繋がったまま、私は両腕を伸ばして正宗さんに抱き締めて欲しいとねだる。正宗さんは私をぎゅつと抱き締めてくれた。すると、正宗さんともつと奥まで繋がる。

「んっ！ あっ……」

だめだ。気持ち良くて、大きな声を出してしまいそう。

でもあんまり大きな声を出したら、寝室まで聞こえてしまう。優月は眠っているけれど、この声で起きてしまったら……。こんなところを、見られてしまったら……

（それはダメ！）

私はぐつと唇を噛んで、声を堪えた。そうしたら、それを察した正宗さんが苦しそうに言う。

「っ、千鶴さん……、俺の肩を噛んで堪えて下さい」

で、でも噛んだら痛いし、痕が残っちゃうし……！

躊躇う私に、正宗さんは壮絶な色気を纏った微笑を浮かべて。

「俺にも痕、残して下さい」

びぎゃああああああああああああああ！！

も、もうっ、なんなのこの人！
三十も半ばを過ぎて、ますます色気を増すとか……！
うちの旦那様はまさに今、男盛りのご様子です。ハイ……

結局、正宗さんの左肩に小さな菌型をつけることになりました。
それから三度、四度と交わり……（ええ、正宗さんの精力は今も衰えておりません）、気付けば私は長座布団の上でぐったりです。

お仕事が忙しかったり、子どもの世話があったりで二人で暮らしていた時ほど営みの機会が持たなくなつたぶん、やるとなつたら長い回数も多いのです。おかげで私は瀕死状態です。

もう、動けない……
でも……

「千鶴さん、ごめんなさい。……愛しています」

とても満たされたお顔で、旦那様がそう言つて下さるから……

(……私も……)

愛しい……のです。

幸せ……なのです！ ……つて、盛大に惚気しましたすみません！！

水羊羹の舞い

六月に入り、雨の日が多くなりました。

けれど今日は晴天！ 私は自転車に乗つて、優月のお迎えに幼稚園へと向かいます。

朝は正宗さんが車で送りますが、帰りは私が自転車で迎えに行くのです。幼稚園までは自転車で十五分ほど。ちなみに雨の日は徒歩です。

私の愛車はいわゆる『子ども乗せ自転車』というやつで、後ろにチャイルドシートがついています。前にはカゴもあるので、お買い物にも便利です！

最初は自転車や徒歩でのお迎えに「続けられるかなあ」と不安でしたが、自転車に乗りながら優月とお喋りしたり、時には歌つたりするのは楽しいです。（も、もちろん歌うのは人のいないところですよ！）

歩いて帰る時も、季節の変化を感じつつ親子二人で歩くのは楽しいものです。良い運動にもなりますしね。なんだかんだで続いています。

今日も帰りにスーパーに寄つて、お買い物をして家に帰ったら……

「あっ！ ろうちゃんだ！」

玄関先に立っていたお客様——朧さんの姿を見て、優月がはしゃぎます。

「よお、遊びに来てやったぞ」

相変わらず傲岸不遜なお言葉！ でもいいんです、それが隼さんです。

私は自転車を止め、早く早くと急かす優月をチャイルドシートから下ろしました。すると優月は自転車用ヘルメットを被ったまま、襲いかからんばかりにがばーつと隼さんの足に抱きつきます。「ろうちゃんーん！」

そして隼さんも慣れたもので、手に持っていた風呂敷包みをいったん置き、優月を抱き上げてくるくる回ります。

うーん、相変わらずの仲良しさん。

とはいえ、いつまでも玄関先できやつきやうふふしているわけにもいかないので、家の中へ入ります。よろしいか。

「そうだ、これ。土産だ」

「わっ、いつもありがとうございます！」

隼さんはうちに遊びに来る時、いつもお土産を持ってきて下さるのです。ありがたや。

今日もお菓子かな。この時間帯に来る時はいつもお菓子を持ってきて下さるからなく。うふふ、さつそく今日のおやつにしましょうか。

優月と隼さんがお茶の間でお絵かきを始めると、私は台所に風呂敷包みを持っていつておやつを支度をします。

お茶の間の襖を開けっぱなしにしているので、会話が台所まで聞こえてくるのですが……

「ろうちゃん！ ぼく、ろうちゃんのえをかくね！」

「おう。じゃあ俺も、優月の絵、描いてやるな」

お絵かき遊びとはいえ、プロの画家に描いてもらえるなんて！

なんとという恵まれた環境でしょうか。幼い頃から芸術に触れ、我が子も感受性豊かな人に育ってくれたらなあと思います。

「……わ！」

そんなことを思いながら風呂敷包みを開けると、中に入っていたのは和菓子屋さんの贈答用のお菓子セット。しかもこれ、子どもの日に隼さんが柏餅を買って来て下さったお店じゃないの！ 老舗の和菓子屋さんですよ。柏餅、すーつごく美味しかったし。これは優月も大喜びですよ。言わずもがな、私も大喜びですよ！

箱の中から水羊羹を選び、涼しげな青緑の小皿を選んでそこに載せる。優月のぶんは洋風の銀のフオークを添えます。ちよつとアンバランスだけれど、優月はこの方が食べやすいから。

それから二人分のお茶と、牛乳を用意。優月、緑茶は飲まないからね。甘い物を食べる時には牛乳を好みます。優月愛用の小さなプラスチック製のコップに牛乳を注いで、お茶と水羊羹と一緒にお盆に載せました。

「ささ、おやつにしましょう」

お茶の間に運ぶと、クレヨンを握っていた優月がぱあっと顔を輝かせます。美味しいものに目が無いのです。

手を休めて、三人でおやつタイム！

ほわ〜！ ぷるん……と上品に揺れる水羊羹。なんて綺麗な小豆色……！ 中に小豆がそのまま入っているのもまた、憎いですねこの！

すつと黒文字楊枝を入れると、その先でさらにぷるん……と控えめに震える水羊羹ちゃん。愛い奴！

そつとお口の中に入れれば、トゥルンとした食感。そしてさらつと、甘さが舌に溶けて……！
う・ま・い・ぞー！！

私は感動のあまり、ふるふると震えてしまいました。

そしてその向かい側（隼さんの隣）にいる優月もフォークで水羊羹をすくい、口の中へ。ちなみにこの子は水羊羹を食べたことはあるのですが、こんなに上等な水羊羹を食べるのは初めてです。

隼さんのおかげで、この子ったら小さいうちから美食に触れてるなあ。

これじゃあ舌が肥えちゃうね。うん。

「！」

口に入れた瞬間、優月は目をまんまるに見開きました。

それを見た私は、「あれ？ この子羊羹苦手だっけ？」と思いました。優月は好き嫌いもあまりなく、なんでも「うまー、うまー」と食べる方なので。

「……………」

優月はフォークを咥えたまま、ふるふると震えています。

子どもの舌には合わなかったのかな？ そういうものつてありますよね。大人にはすつごく美味しくても、子どもの的には「まずい！」もの。

すんごく美味しいんだけどな、この水羊羹……と、私はもう一口食べながら、優月の様子を窺っていました。

隣の隼さんも、何かと優月を見守っています。

すると……

優月はおもむろに、すつくと立ち上がり……

「ご」

両手を高く掲げ、くねくねつと……

ま、舞い始めましたああああああああ！！

なんででしょうか、あの腰の動きは……！！

水羊羹のぷるんぷるん加減を表現しているのでしょうか！?

あつ！ 今度は何やら風がそよぐように両手をゆらゆらと振り始めました！ 若干フラダンスのように見えるくもないです！

そしてくるつと一回転！ びしっ！ とポーズを決めております！！ フォークを高く掲げております！！

「ごはっー」

それまでばかりと優月の動きを見守っていた隼さんが、撃沈しました！

テーブルに顔を突っ伏して爆笑しております！　かくいう私も笑いを抑えきれず、口元がひつくひくしております！！

「ろうちゃん！　これ、うまー！　だ！！」

目をキラッキラさせて、世紀の大発見のように朧さんに報告する優月。

どうやら、思わず舞ってしまうほど水羊羹がお気に召した模様です！

(ひーっ)

しかし……まさか……踊るとは……っ！！　爆笑です！！

大人二人の腹筋を崩壊寸前まで追い込んだ優月は、その後も満足そうに、もぐもぐと水羊羹を食べていました。

そして朧さんが自分のぶんも優月に与え、優月が感謝の舞いを踊り、朧さんの腹筋はさらにダメージを受けたのでした。

そしてその日の夕食後。

私は正宗さんのぶんの水羊羹と熱いお茶を食卓に運んだ。ちなみに私と優月のデザートは林檎です。

すると、めざとい優月が水羊羹の存在に気づき、「いいなあ、いいなあ」というオーラを全開にして正宗さんの傍にぴったりと張り付きました。

正宗さんは優しいので、いつも自分のぶんのデザートを優月に分けてあげてるからなあ。きつと

あの水羊羹も、半分は優月のお腹の中に収まることでしょう。

あっ、そうだ……！！

私はあることを思い付き、こしょこしょと正宗さんに耳打ちした。

「正宗さん。この子に水羊羹をあげると、面白いものが見られますよ？」

「面白いもの……ですか？」

「はい」

こつくりと、私は大きく頷く。

正宗さんは一口分の水羊羹を優月の口にアーンして運ぶ。

「うまー！！」

念願の水羊羹を分けてもらい、優月は幸せそうに相好を崩す。

そして……

「えっ!?」

出たああああああ！　本日何度目かわからない（そんなにやったのか）、『水羊羹の舞い』です！！　なんだか回を増すごとに身体のキレが良くなってきているように見えます！

あああっ！　正宗さんがポカーン……から、ふるふる震えていらっしやいます！！　口元を押さえています！　ですよね！　おかしいですよねこれ！！

そして……

おっとー！　スマホを取り出しましたー！　写真か!?　写真なのか!?　いやちがう！　あれ

は……動画だー!! 動画を撮っております! 我が子の『水羊羹の舞い』を撮影しております!
おお! 撮られていることに気付いた優月ですが、はにかみながらもノリノリで回っております!
す! あれは……新しいアレンジ!? しかも決めポーズでウインクしおった! あれが優月のキメ顔のようです!!

その日、我が家のお茶の間は楽しい笑いに包まれました。

* * *

昼休み。学食で昼食をとり終えた俺は、社会科準備室の自分の机に座って、鞆からスマートフォンを取り出した。パスワードを入力してロックを解除。現れた待ち受け画面は先月、家族三人で遊園地に行った時に撮った千鶴さんと優月の写真だ。二人はピースサインをして、こちらに笑顔を向けている。

それから、昨日撮ったばかりの優月の動画を再生する。水羊羹を食べた優月が美味しさのあまり舞い始めた姿だ。それは、千鶴さんによって『水羊羹の舞い』と名付けられた。

突然踊り始めた時はびっくりしたが、「美味しい」という感情を素直に身体で表現した我が子が可愛いと思い、ついつい撮らずにはいられなかった。そう言ったら、千鶴さんには『親バカですなえ』とくすぐす笑われたけれど。

うん、自覚はあります。だってうちの子は奥さんに似て素直でとっても可愛い。

マナーモードにしているから音は出ないが、小さな画面の向こうで踊る我が子を見るとついつい相好が崩れてしまう。

そんな風に我が子の動画で癒されていたら、同じ社会科教師の江川先生から「楽しそうですね。何を見てるんですか?」と声を掛けられた。

江川先生は俺より十歳ほど上の地理の先生だ。奥さんと大学生の娘さんが一人いる。

「実は昨日、息子が突然踊り始めまして……」

俺はふっと込み上げてくる笑いを堪えながら、江川先生にもこの動画を見せた。

「……っ! か、可愛いですねー!」

江川先生は口元を押さえている。どうやらツボに入ったらしい。

「ふはっ! このキレ! あああ、ドヤ顔って言うんですっけ? この決めポーズも、かわっ……」

ぶふっ、面白くって、可愛いですね〜」

そうですね、そうですね。

うちの子は可愛いでしょう!

爆笑する江川先生に、準備室にいた他の先生も何事かと寄って来て……

他の先生たちにも見せたら、江川先生と同じように爆笑。そしてしきりに「可愛い〜」と言ってくれた。

その話が広まってしまったのか、その後の休み時間や放課後には他の先生方も「見せて〜」とやって来た。しまいには幸村まで「ゆーちゃんのオモシロ動画あるって聞いたよ! なんて俺に見

せないの！」と怒鳴り込んできた。

しょうがないから幸村にも見せてやったのだが、どうやら幸村は優月が『水羊羹の舞い』を踊ったこと自体知らなかったらしい。

「水無月から聞いてないのか？」

てっきり、昨日水無月が話したんだと思っていたのだが。

「水羊羹持って行ったことは聞いたけど、そこから先は思い出し笑い……っていうか、もう堪えられないとばかりに爆笑しちゃってさ。何があつたのかは聞けなかつたのよ。でも……」

画面の向こうでビシッ！ と決めポーズをとる優月に、幸村はぶはっと噴き出す。

「やっとその理由がわかつた！ こりや可愛いわ！ もー、ゆーちゃん好きっ」

幸村は人のスマホを勝手に弄って、もう一度最初から動画を再生し始めた。

「うるさい。うちの子はやらん」

「そりゃくれるなら欲しいけど、とらないよ。あー、可愛いっ。俺も今度水羊羹持って遊びに行こうつと。生で見たいわコレ」

まあ、生で見たい気持ちはわかる。それに、きっと優月も喜ぶだろう。

そんなことを思いながら二人で動画を見ていたら、ちょうどメールの着信があつた。千鶴さんだ。

『千鶴さんが、昨日と同じ和菓子屋さんのどら焼きを買って来て下さいました！ どら焼きでも舞うのか、母は注目しております』

「……………」

そのメールに、俺と幸村は揃って噴き出した。

「ちっ、千鶴さん……………」

「あははは！ ちーちゃん最高!!」

そしてその数分後、千鶴さんから『どら焼きの舞い』と名付けられた動画が届いたのだった。